

共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」(jrp000285)

2024年度第2回研究会(通算第4回目)

日時:2024年11月16日(土);11月17日(日)

場所:アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)304マルチメディア会議室+オンライン

本共同研究課題の通算4回目となる今研究会では、6件の報告を通じ、言語学のフィールドワークにおける過去の失敗事例についての情報共有をおこない、それにもとづき討論した。当日報告は以下のものである。

呉人恵(AA研共同研究員,北海道立北方民族博物館)「『失敗の』言語学から『成功の』言語学への遠い道のり:コリヤーク語の場合」

青井隼人(AA研共同研究員,東京外国語大学)「フィールドワーカーはあきらめた:ナナメの足跡」

下地理則(AA研共同研究員,九州大学)「フィールド言語学者になったという失敗:向いてないことをしてきたこれまでとこれから」

米田信子(AA研共同研究員,大阪大学)「すべては『失敗』から始まった:アフリカ編」

占部由子(AA研共同研究員,神戸市外国語大学)「八重山でのフィールドワークでの失敗」

蝦名大助(AA研共同研究員,京都外国語大学)「研究の多い言語と少ない言語:南米でのフィールドワーク」

研究会はAA研304マルチメディア会議室での対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。報告のなかにはこれまで通りプライベートな問題に立ちいった内容のものもあったため、本報告書においても差し支えの無い範囲で概要を述べる。

第一報告者の呉人は、ロシア・マガダン州を中心としたコリヤーク語のフィールドワークについて、これまでの経緯と事例別の失敗について報告した。フィールド言語学、とくに危機言語を対象とする記述的研究の場合は、いわゆるボアズの3点セット(Boasian trilogy)と呼ばれる記述文法・辞書・テキスト(談話資料)の公刊が求められるが、一方で当該言語においてより興味・関心を惹く言語事象を対象とした研究もおこなわれる必要があり、限られた時間の中でどのようにバランスをとるべきかという問題提起がなされた。これは本研究課題参加メンバーの多くが抱く悩みでもあり、とくに近年の成果主義においては3点セットの公刊よりも個別言語事象を対象とした研究が優先されてしまうのもやむを得ない状況にあるという意見が出た。

第二報告者の青井は、自身のライフステージの変化と研究・興味関心の変化とを並行して紹介しながら宮古語のフィールドワークの経験について報告した。コロナ禍やライフステ

ージの変化によってフィールドワークが停滞したこと、より興味関心を惹く研究テーマに出会ったことなどについて触れ、やはり呉人報告と同様に「やらなければならないこと」と「やりたいこと」との折り合いの付け方の難しさが問題となることがわかる。

第三報告者の下地は、とくにデータの分析に関する「失敗」事例、例文倫理、調査時間といった問題について自身の経験をもとに報告した。記述研究においては先行研究や自身の文法観などによって、時として重要な言語現象に気づかず処理してしまうケースがある。そのような「見逃し」の問題は、他の参加者も抱えている可能性があり、改めてデータの整理と見直しが重要となることが認識された。コンサルタント（調査協力者）の心情にマイナスの影響を与えるような例文・調査手法に十分配慮すべきという提言もなされた。

第四報告者の米田は、自身の経歴と、研究対象言語の一つであるマテング語を選んだ「失敗」（結果としては成功）や、調査地域へのアクセスの困難さ、論文ごとに異なる表記ゆれの問題といった点について報告した。表記ゆれ・入力の問題に関しては研究会の場で他のメンバーから解決策が提案され、その点でも有意義であった。

第五報告者の占部は、話者世代よりも下の世代との信頼関係の構築に関する失敗や、調査時のスケジュール調整の困難さなどについて報告した。コミュニティの「外」の人間である研究者に対する感情にどのように向き合うのかという問題は、現地に赴かないとわからないこともあり、困難が伴う。最大限の配慮をおこなうことが必要となるだろう。このほか、記述対象が個人語になってしまうおそれがあるが、それを当該言語のラングとして記述してよいのかという問題提起もなされた。これはとくに危機度が深刻な言語においては個人語の記述となるのが避けられないという状況をふまえればやむを得ない問題であり、そのためにはデータの担保が重要となるだろう。

第六報告者の蝦名は、南米での自身の言語調査の経験をもとに、研究の蓄積がありある程度話者も多い言語と、研究が少なく危機度も高い言語のフィールドワークの違いについて報告された。同じスペイン語圏でありながら調査地域が異なることで媒介言語のスペイン語の語彙も異なるという問題、コンサルタントやその家族・友人との付き合い方、現地でのふるまいといった、参加者の多くが共通して抱える悩みについても報告がなされた。

以上6名の報告のほか、成果についての相談をおこなった。

（文責：山越康裕）

※当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.